Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-04-28

女工,お針子,家庭裁縫 : 19世紀アメリカのファッション文化における女性

平芳, 裕子

(Citation)
神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要,7(1):43-50

(Issue Date)
2013-09

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/81005360

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81005360

神戸大学大学院人間発達環境学研究科 研究紀要 第7巻 第1号 2013
Bulletin of Graduate School of Human Development and Environment, Kobe University, Vol.7 No.1 2013

研究論文

女工，お針子，家庭裁縫
―19世紀アメリカのファッション文化における女性―

Factory Girl, Seamstress, and Home Sewing: Women in 19th-Century American Fashion Culture

平　芳　裕　子*
Hiroko HIRAYOSHI*

要約：本論は，19世紀前半のアメリカにおいて，布地の扱いをめぐる女性の習慣がいかに変化したのかを考察するものである。歴史を通じて布作りは女性の仕事と見做されてきた。ところが産業革命による紡織産業の発展は，それまで家事の中で大きな比重を占めていた糸紡ぎや機織りから女性を解放した。農村の余剰労働力となった女性たちは，機械を監視する工場労働者として，あるいは都市のお針子として賃金労働に従事した。ローウェルの紡績・織布工場の女工たちは布地の生産に携わると同時に，余暇には服飾品を購入し，消費者としても育成された。一方でお針子は，紡績・織布の機械化により次々と生産される布地を，ミシンの実用化前の時代において，過酷な労働環境と低賃金に耐えながら衣服に仕立てた。しかしながら下層階級だけでなく，家庭との結びつきを象徴する針仕事には様々な境遇の女性たちが従事した。そして都市経済の発展とともに増大した中流階級は，女性誌に掲載され始めた裁縫記事を頼りとしながら，家庭裁縫に流行のスタイルを取り入れていった。このようにあらゆる階級の女性たちが，布地や衣服を取り巻く習慣を大きく変えながら，流行文化の形成に加担していった。19世紀前半のアメリカ女性たちの衣服をめぐる経験は，様々な国々で近代化の通過点に生きた女性たちの経験の変容を縮図として示していると言える。

1．はじめに

その名も『女の仕事』と題した著作において考古学者のエリザベス・W・バーバーは，歴史を通じて糸紡ぎや機織りは女性の仕事であったと述べている[1)]。ところが産業革命による繊維産業の発展は，衣服の生産と消費に関わる女性たちの行動を大きく変えた。それも一様ではない過程を経て，あらゆる階級の女性の暮らしを変質させたのである。本論は19世紀前半のアメリカを主たる対象として，繊維・衣服産業の発展がもたらしたファッションと女性の関係の変容について考察するものである。19世紀の衣服産業における女性の労働をめぐっては，産業革命をいち早く迎えたイギリスの下層階級に関する調査報告はこれまでにも数多く存在し，筆者も既発表論文にてロンドンのお針子労働とその表象について考察を行った[2)]。しかしながら同時代のアメリカに関しては多くは知られていない。なぜならイギリスから18世紀後半に独立したアメリカの19世紀前半とは国家の発展途上にあり，統計調査や社会報告が充実するのは19世紀後半のことだからである。さらに従来の服飾史やファッション研究ではフランスを中心とする服飾様式の変遷やファッション・デザインの創造性が主として研究されてきたため，アメリカのファッションはほとんど注目されてこなかった。しかしながら断片的ながらも現存する資料を精査することによって，19世紀前半に産業革命を迎え繊維産業を大いに発展させたアメリカにおいて，衣服をめぐる女性たちの習慣が劇的に変化していく様相が明らかとなる。それは単に女性たちが社会の中で豪華な服飾を身に纏うということではなく，衣服を「縫う」という女性たちの行為をクローズアップすることで明らかとなる歴史的変容である。

そこで本論ではとりわけ「縫う」という行為を軸として，19世紀アメリカの女性たちがどのように衣服と関わるようになったのかを考察したい。これから本論で見ていくように，その関わりようは単一のものではなく，実のところ三つの類型，すなわち女工，お針子，家庭裁縫に大きく分けられる。いかなる社会的背景のもとに女性たちは登場し，どのように服との新しい関わり方を示していくことになるのだろうか。後に既製服産業を高度に発展させたアメリカのファッションにおける女性たちの役割を考察することは，現代社会における私たちの衣服を取り巻く生活を再考する際にも大きな示唆を与えるものとなるだろう。それではこれから，

*　神戸大学大学院人間発達環境学研究科准教授

（2013年4月1日　受付
2013年7月1日　受理）

1830年代から1850年代にかけてのアメリカで発刊された新聞，雑誌，政府の調査報告，女性たちの手紙や日記などを手がかりとしながら当時のアメリカの風景を再構成することによって，19世紀前半のアメリカ社会を生きた女性たちのファッションに関わる様々な経験の一端を明らかにしたい。

2. 紡織の機械化と女工の誕生

そもそも産業革命以前の時代，衣服はどのように作られていたのだろうか。衣服を作るためにはまずその材料としての布地がなければならない。しかしその布地自体が18世紀のアメリカでは貴重品であった。都市部であればイギリスなどのヨーロッパ諸国から輸入された布製品を入手することもできたが，地方の住人は家庭内での生産に頼らざるを得ない。そしてどの家庭にも備えられていた紡ぎコマを使って糸を紡いだのが女性たちであった。糸を紡ぐ作業は時間はかかるが座ったまま行うことが可能であり，家族や友人との団らんを兼ねることができる。しかも単純な反復作業であり中断しても容易に再開することができたため，子育てにおけるほ乳の必要性にも適っていた[3]。けれども女性たちは糸紡ぎだけをしていたのではない。ろうそくやほうきを作るのと同じように，生活のために必要とされる膨大な家庭内労働の一つとして糸を紡いだのである[4]。糸が完成すると織りや染めの仕事はしばしば専門の職人にまかされたが，完成した布地を用いて女性は家族や自分のために衣服を作った。裕福な家庭であればドレスメーカーに注文することができたが，大抵は友人から借りた衣服や手持ちの衣服をもとに類似の形の服を作る。より高度な技術を持つ女性に布地の裁断を依頼する場合もあったが，縫製は自分で行った。こうして糸から，時には原料となる亜麻や羊から育てられ，一針一針丁寧に縫われた衣服は，少しの無駄もなく使用された。大人用に仕立てられた衣服が着古されれば，次は子供服に作り直され，さらに家庭内で使用する様々な布地に変えられ，使い尽くされていく[5]。そのため当時の人々の生活を物語る衣服や布地類は実証的資料としてはほとんど残らない。そして産業革命が起こり，それまで家庭内で時間をかけて手作業で行われていた衣服の生産活動が変化し始める。革命以前は，高価な輸入製品を購入するのは主に裕福な人々だけだった。しかしながら機械化が進みより安い布地の生産が可能になると，女性たちは大変な手間と時間をかけて家庭内で布地を作るよりも買う方を好むようになる。その傾向は19世紀前半に加速し，家庭内での布地生産の技術は忘れられることになった[6]。

サミュエル・スレーターがイギリスの水力紡績機の技術をアメリカに持ち込んだ翌年の1792年，アメリカで最初の紡績工場がロードアイランドに誕生した。以来1809年までに67の工場が設立され，同年さらに25の工場が操業を開始した[7]。1812年に勃発した米英戦争によりイギリス製品の輸入が途絶えたため，アメリカ国内の紡績業は更なる発展のチャンスを掴む。1814年にはフランシス・キャボット・ローウェルが，マサチューセッツ州ウォルサムのチャールズ河畔に紡績と織布を同一の工場内に統合した大規模な工場を設立し，低い単価で大量の織布を生産することに成功する。ローウェルは常勤労働者を確保するために，新しい労働力として農村の少女たちに注目した。もちろん工場労働に対する農家の批判はあったが，それは様々な利点によって緩和された。農家は娘を工場で働かせることで収入を得ることができ，工場の就業規則と規則正しい寮生活は婚前の子女に対する道徳教育に繋がると見做された[8]。一方少女たちにとっての工場労働とは，一時であれ父権社会からの自立を意味した。工場や宿舎の監視下にありながらも，農家を離れて自分自身で賃金を稼ぎ，小遣いで商品を購入し，余暇を楽しむ自由を得ることができたのだ。1842年のローウェルの工場での女子工員たちの姿をディケンズは『アメリカ紀行』に書き留めている。「手軽なボンネット帽をかぶり，暖かそうなマントとショールを身につけ，木底靴やコルク底靴」[9]をはいた女性たちが，清潔で快適な仕事場で働いている。そして工場の外には学校，教会，宿舎，病院など，充実した様々な設備が建設されていた。イギリス人のディケンズが感嘆して読者に伝えようとしているのは，平均12時間の気の抜けない作業に励む「労働者」である女性たちが一方で，寄宿舎の共有ピアノや図書館での読書などの余暇を楽しみ，“*Lowell Offering*[10]”（図1）と題した定期刊行物を自ら作成していたことである[11]。

ほとんどの製造業がまだ伝統的な道具に依存していた1840年代，織物工業はその例外として発展していた[12]。ルイス・マックレーンによる1832年の製造工場の調査では，北東部諸州の織物工業に工場制の生産形態が集中していたことが示されている[13]。1831年に紡績工場で働いていた人口6万7600人のうち女性は4万人近くであり，その割合は全体の58%であった[14]。ローウェルの工場では1827年には工員1200人のうち90%が女性であったが，1848年には1万3000人のうち9000人が女性であった[15]。他州から出てきた少女たちはしばらく働くと再び農村へ戻ったため，これらの女性労働者数は流動的とは考えられるものの，女性が全工員に対して占める割合は注目に値する。そして二十年の間の大幅な人数増加は，この時代の繊維製品の急速な需要の高まりを示していると言える。実にローウェルの女工たちが残した手紙には，彼女たち自身がしばしば衣服や装飾品を購入していたことが記されている[16]。農村出身の多くの少女たちにとって，工場での賃金労働の目的の一つは服飾品を手に入れることであった。少女たちは労働力として紡織産業の生産を支える一方で，完成した流行商品を購入する消費者としても育成された。ところで，女工たちが生産に携わった布地は一体どのようにして衣服や装飾品へと変えられたのだろうか。

紡績機の発明と織機の改良により，布地は短い時間で大量に生産されるようになる。しかし次々生産される大量の布地を縫製するためのミシンは，19世紀前半にはまだ実用化されていない。そこで衣服や装飾品の縫製には未だ大勢の人手を要する。つまり家庭内の布地生産から解放された女性たちの余剰労働力は，一方では工場労働へ，一方では機械化されていない縫製の仕事，すなわち「お針子労働」へと再配分されることになったのである。

3. 衣服産業の発展とお針子労働

前節においては，産業革命により家庭内での布地の生産活動にもたらされた変化を見た。紡績・織布工場の設立と発展により，布地生産は家庭における女性の手仕事から工場の機械による大量生産へと移行した。工場製の安価な布地の普及によって家庭での布地生産の習慣は急速に失われた。女性たちは単調で時間のかか

る糸紡ぎから解放されたのである。ところが家庭内労働が軽減され，繊維工場で労働者として働く女性が出現する一方で，より「縫う」作業に集中する女性が登場する[17]。もちろん産業革命以前の時代から女性は服を縫っていた。けれどもそれらは家族や自分のための衣服であり，女性たちが行っていたのは家庭内における無償の家事労働としての裁縫である。いまや豊富な布地を衣服や装飾品へ仕上げるために，多くの「手」が必要とされるようになる。それが賃金労働としての裁縫に従事する女性たち，すなわち「お針子」である。彼女たちの暮らしぶりはどのようなものだったのだろうか。

19世紀前半のアメリカのお針子たちの実態を証言する資料は数少ない。しかしながらいくつかの記録を通して，東部諸都市で多数の女性たちがお針子労働に従事した様子を知ることができる。例えば1820年代後半のフィラデルフィアについては，印刷業を営み自ら社会批評も手がけたマシュー・ケリーの報告がある。それによると，1827年のフィラデルフィアでは400名のお針子が政府に雇われ，八ヶ月間にわたり軍服用のシャツやズボンの製造を行ったという。熟練したお針子たちが一週間でおよそ9点の品を作ったが，それらは１ドル12セントほどの稼ぎにしかならないと述べられている[18]。ここから当時すでに軍服として既製服が使用され始め，既製服製造のために政府によって新たな雇用が創出されたこと，しかしながらそれにも関わらずお針子たちは低賃金で貧しい生活を余儀なくされたことがわかる。また二年後の1829年にも，ケリーはより詳しい報告を行っている。それによると，お針子たちは仕事探しに多大な時間を費やすが長期の仕事はほとんどない。たとえ職を得たとしても週につき１.25ドルほどしか稼げず，部屋代や燃料費にほとんどが消えてしまう。しかも一年のうち少なくとも八週間は病気や職探しや子供のために働くことができない。すると食料や衣類にかけられる費用は一年たったの16ドルほどであるという。特に，夫に先立たれた女性が子供を抱えながら針仕事をせざるを得ない場合には極貧状態となる。低賃金の理由は同業者間での競争の激化に加え，お針子を雇う女性たち，つまり裕福な女性たちによる無慈悲な注文にもあるとする[19]。このようにケリーの報告は，1820年代後半にはすでにお針子たちが苦境にあったことを伝えている[20]。しかしながらお針子労働が実際に大きな社会的注目を浴びるようになるのは，その後衣服製造において目覚ましい発展を遂げたニューヨークにおいてであった。

ケリーが報告したように，1830年代半ばまでの既製服は軍服や農民のための一部の衣料に限られていた。ところが1830年代半ば以降，注文服を仕立てる余裕のない事務員や店主，裕福な顧客のために，高級既製服の分野が開拓され始めた。あらゆる階級の人々に既製服が受け入れられ始め，ニューヨークの既製服業界は1850年までに国内全域に販路を広げる[21]。そしてその著しい発展を支えたのがお針子たちであった。ジョージ・G・フォスターは，ニューヨークのお針子たちの長時間労働と低賃金について詳しく述べている。（図2）

> 綿シャツやフランネルの肌着は一枚6セント。上手なお針子ならば一日2枚，手の早いお針子なら早朝から夜中まで縫い続けて3枚できる。並のお針子ならば一週間に75セントだが，手の早いお針子なら週に1ドル12セント程度稼ぐ。もちろん休日や病気，事故や職探しの期間は考慮に全く入れていない。（中略）襞飾り付きのリンネルのシャツは，腕の良いお針子でも15～18時間縫い続けて一日一枚50セントの稼ぎだが，並のお針子ならば二日はかかる。（中略）結局のところ，お針子たちが運良く仕事を続けられたとしても，週に75セントから2ドルほどの稼ぎである[22]。

このように，お針子たちはいくら縫っても生活費すら十分に稼げない。その一方で大量の衣服をもとに利益を得ていたのが製造業者たちであった。

フォスターによれば，製造業者たちの巧みな下請けシステムは次のごとくである。衣服製造にかかる工賃を抑えるために，製造業者たちは多数の女性をまず「見習い」として雇う。しかしすでに上手に速く縫うことのできる女性ばかりを雇い，六ヶ月の見習い期間の間にただ働きをさせる。ところが彼女たちは仕立ての技術について新たに学ぶことは何もなく，ドレスの裁断について一般的な指示を数時間与えられるだけで，見習い期間が終了すると解雇される。ここで製造業者は彼女たちの代わりとして新たな見習いを雇う。のちに「苦汗制度」と名付けられたシステムによって，製造業者は多大な利益を得，かたや大勢の貧しいお針子が登場したのである。ではどれほどのお針子が当時のニューヨークに存在していたのだろう[23]。その正確な数字を知ることは難しい。1855年の統計では，衣服仕立工・お針子として9819人の数字が挙げられている。当時のニューヨークの人口は1850年に51万5千人強であるため，その後5年における増加を見越しても，お針子1万人弱の数字は少ないように思われる。しかしお針子は当時のニューヨークにおける主な職業の五番目，全体に占める割合は4.7%である[24]。さらに育児や家事をしながらの家庭での内職も考慮するならば，お針子労働に従事した女性の数をさらに多く見積もらなければならない。統計上の明確な数値としては現れないとしても，衣服産業の発展とともにお針子労働に携わる女性が急増したことは確かであると思われる。

4. 女性誌の流通と主婦の家庭裁縫

これまで見てきたように，衣服産業の発展は多数の女性を賃金労働者へ変えた。従来，家庭内で布地や衣服を手作りしていた女性たちは，農村を出て地方の工場で働き，都市でお針子労働に従事した。農村の女性たちにとって工場労働は比較的良い条件と賃金の仕事であったと言えるが，都市の上流・中流階級にとってはあくまで下層階級の携わる労働でしかなかった。一方で，特殊な技能を持たない女性たちが工場労働につけない場合は，唯一の教育であった裁縫を手段とするほかなかった。とはいえ「お針子」の出自は様々であった。たとえ裕福な家庭に生まれ育ったとしても，経済的に男性に依存していた女性たちの社会的身分は不安定であった。当時の物語には，女性ならば誰の身にも起こりうる不幸が描写されている[25]。例えば父親の事業の失敗により働かざるを得なくなった娘。あるいは夫との死別により，幼い子供たちを養っていかねばならなくなった妻。その際，上層階級の出身であるがゆえに下層階級の携わる工場労働は選択肢としてあり得ない[26]。許される仕事といえば家庭教師やピアノの教師であるが，零落し

たいまや自宅に教室を開くスペースはなく，病んだ家族や幼子のために外に出ることもままならない。そこで残された道が「お針子」である。ここで「裁縫」は，生活の糧を得るための賃金労働としては蔑みの対象となるが，家庭内の家事の一つであり伝統的な女性観を逸脱することのない仕事として，上層階級出身の女性たちにも社会的に許容される仕事であった。実際，テキサスの裕福な家庭に生まれ育ったマダライン・エドワーズは，結婚生活の破綻と子供との死別を経験したのち，恋人の庇護を受けながらもお針子として日々を凌いだ[27]。さまざまな境遇に置かれたお針子たちが，上流階級のファッションに対する欲望を満たすべく働いたのである。

19世紀前半のアメリカにおけるファッション文化の興隆は，織布産業の発展に加え，女性誌の普及が重要な役割を果たしている。まだファッション雑誌がアメリカに登場する以前に「ファッション」を積極的にテーマとして掲載し，19世紀の代表的女性誌として成長したのが『ゴーディズ・レディズ・ブック』(*Godey's Lady's Book*) である[28]。同誌は東部アメリカの上層階級の女性たちに，ヨーロッパのライフスタイルや最新流行を紹介しながらアメリカ的な装いを提案した。1830年の創刊号より，パリやロンドンの流行のスタイルを文字情報として掲載し，まもなく流行のスタイルで装う女性を描いた服飾図版，すなわちファッション・プレートを掲載するようになる[29]。(図3) 服の色・形・素材を図示したファッション・プレートが，ほぼ毎号雑誌の中表紙の前に添えられ，最新流行を読者に伝えた。では読者たちはどのように流行の服を手に入れたのだろうか。同じく雑誌に掲載された記事から，読者たちがドレスを仕立てる際にドレスメーカーを大いに頼りにしていた様子が窺える。無理な注文をしないように，注文を急かさないように，お針子たちへの配慮が求められている[30]。先に取り上げたお針子マダラインが記した日記には，彼女が1844年の暮に五着もの注文を抱えており，さらに年明けまでにもう三着のドレスを作らなければならなかったことが述べられている。曰く「痛みで死にそうになるまで縫い続けた。」[31] 裕福な女性たちの新しいスタイルのドレスを手に入れたいという欲望は，それを作るドレスメーカーやお針子たちの犠牲なくしては叶えられなかった。そして彼女たちの苦役と貧困は前節で見た通りである。しかし衣服産業の促進という観点から見るならば，この女性誌の重要性はただ一部の富裕層の需要を喚起したことにあるだけではなく，流行のスタイルを取り入れる手段をより多くの中流階級に伝達していったことにある[32]。

19世紀の半ばには都市や産業の発達とともに中流階級が成長し，上昇志向を持った彼らの間にファッションに関わる上流階級の習慣が徐々に取り入れられていく[33]。中流階級のファッションに対する関心の増大は，『ゴーディズ・レディズ・ブック』の出版部数の変化自体にも見ることができる。1840年代末に二万五千部であった出版部数は1860年には十五万部と見込まれたが，これは単に読者数の増加だけではなく読者層の拡大をも示していると考えられる[34]。そしてこの時代に雑誌の掲載内容にも変化が見られる。例えば「コテージモデル」と称した連載記事では夫婦二人と子供二人の核家族にふさわしい住居スタイルや家具のデザインが紹介され，またファッション・プレートには子供をあやす母親が登場し，流行の装いだけではなくカーテンや家具等の室内調度品まで描かれた[35]。それまで同誌は「レディ」のための教養や知識を主たるテーマとしていたが，家庭内で生活する「主婦」の関心事がさかんに取り上げられるようになるのだ。さらに「裁縫」に関する話題が登場した[36]。というのも経済的余裕のない中流階級の女性たち，つまり衣服の全てをドレスメーカーに注文することのできない女性たちは，自分で縫うしかない。中流階級の主婦たちが流行のスタイルを取り入れるための具体的なアドヴァイスが掲載され始めるのである。

もちろん，女性たちはそれまでにもお互い協力しながらドレスを作った。新しいスタイルのドレスの場合には，すでに着ている自分の服のパターンをもとにした。特にサイズ合わせは友人たちと助け合って調整し，縫製は各自で行った[37]。このような衣服の多くは失われてしまったが，私たちは女性誌を通して，当時の女性たちがドレス作りのために得た新たな手段や知識を知ることができる。例えば1853年には，子供服の作り方が特集記事となって掲載された。(図4) 男子服のスタイルと作り方が紹介されているが，文章には「これは可愛らしい服に見えますが，もっと重要な点は，簡単に作られているということです」とある[38]。「可愛らしさ」という付加価値をもった魅力的なドレスが自作可能であることが強調されている。注目すべきはドレスの完成図だけではなく，裁断図が添えられていることだ。それは布地の形を示した簡単な縮図であるが，裁断が技術と経験を要する職人仕事であったことを思えば，主婦にとっては大きな手助けとなる。このような裁断のための道具に対する需要は，同年の型紙販売店の紹介記事にも見て取れる。女性用のドレスやエプロンなど実物さながらのパターン（型紙）を取り扱うフィラデルフィアのサプリー夫人なる人物が紹介されている。ドレスメーカーや商人が彼女の商品に注目しているというが，重要な点は一セット六パターン入り 3 ドルで読者も購入可能と述べられていることである[39]。もはや型紙を取るために友人から服を借りる必要はないし，友人に服を貸すことで自分のドレスが傷んでしまう恐れもない[40]。それは家庭裁縫の作業を軽減する極めて有益な考案物であったのだ。そして型紙に対する需要の増大は，『ゴーディズ・レディズ・ブック』自体が誌面に掲載したパターンの取扱いを始めたことにも表れている[41]。

このようにして，1850年代には衣服制作のための特集記事が相次いで連載され始めた。1854年には「ドレス作りのための実用的ガイド (“Our Practical Dress Instructor”)」と題して，ドレスを纏った人物像と裁断図，そして制作方法を説明した連載記事が始まる。(図5) また1857年からは「子供服の裁ち方・作り方 (“How to Cut and Contrive Children's Clothes”)」と題して，成長の早い子供のための様々な衣類，例えば寝間着やエプロン，キャップなどを作るためのアドヴァイスが連載されるようになった[42]。1850年代初頭にはまだ女性たちは手縫いで時間をかけて服を仕上げていたが，家庭用ミシンの構造と仕様を解説し，その利便性を説明する記事も掲載された[43]。(図6) このようにして家庭裁縫のための連載が雑誌に定着していくのである。もちろん，当時の女性たちがこれらの情報を頼りに，実際にどれだけの服を作ったのかは想像の範疇でしかない。衣服は着古され家庭用品に形を変えてしまい，型紙もまた服が出来上がってしまえばただの薄紙でしかな

く，時代を超えては残らない。しかしながら私たちは，雑誌の誌面に向けられた女性たちの好奇のまなざしに，自らの視線を重ね合わせることができるのだ。

5. おわりに―19世紀のファッション文化と女性たち

これまで，19世紀前半のアメリカにおける女性と布地あるいは衣服との関わりの変容を見てきた。針仕事は古来女性の仕事と見做されており，家族のための服作りは家事において歴史的にも大きな比重を占めていた。ところが紡績・織布産業の発達により，それまで膨大な時間をかけて行われた糸紡ぎや機織りから女性は解放された。ここで家庭内の余剰労働力となった女性たちは，工場労働者や都市のお針子となって，急速に発展しつつある織布・衣服産業を支えた。一方，都市や産業の発達によって急増した中流階級の女性たちは，女性誌の伝える流行情報と裁縫記事を参考にしながら，既存の服を用いて衣服制作に流行を取り入れていった。彼女たちは上流階級のように，洗練されたファッションと豪華な装飾で着飾ることはなかっただろう。しかしあらゆる階級の女性たちが，さまざまな形で新たな流行文化と関わりを持つようになる。自らが生産者であると同時に消費者としても育成された工場労働者たち。あるいは身を粉にして縫い続けても生活費すら満足に稼げないお針子たち。パターンやミシンを手に入れ家族や自分のための服を縫う主婦たち。女性たちは衣服制作に関わる習慣を大きく変えながら，流行文化の生成に加担したのである。

その後の19世紀後半のアメリカは，パリ・ファッションの影響を強く受けながらファッション産業を発展させていく。当時のニューヨークを舞台にしたイーディス・ウォートンの小説には，パリのオートクチュール店ウォルトでドレスを仕立てる婦人の姿が描かれている[44]。しかしながらファッションは，創造的スタイルを考案するファッションデザイナーや最新流行で着飾った上流階級だけのものではない。19世紀後半に発展を見るアメリカのファッション文化は，本論で見てきたように，女工やお針子，家庭で「縫う」女性たちとファッションとの関わりの延長線上にある。そしてこの19世紀前半のアメリカ女性たちの経験は，様々な国々の近代化への通過点に生きた女性たちの経験を，縮図として映し出しているのである。

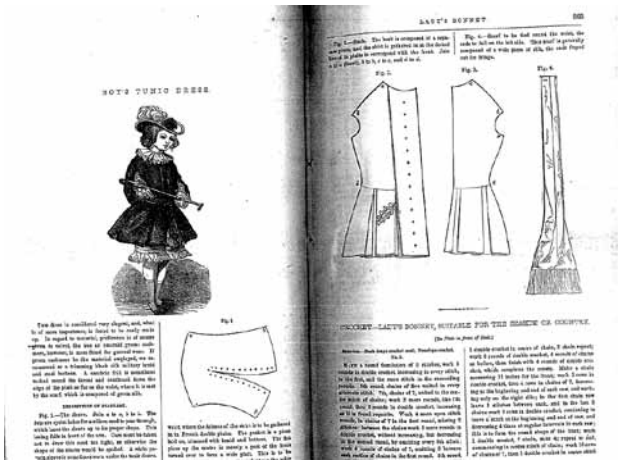
（付記）本論は平成22～24年度科学研究費補助金（若手研究 B）「ファッション文化史からみる『お針子』の表象―19世紀アメリカを中心に」の研究成果の一部として公表するものである。

【参考図版】

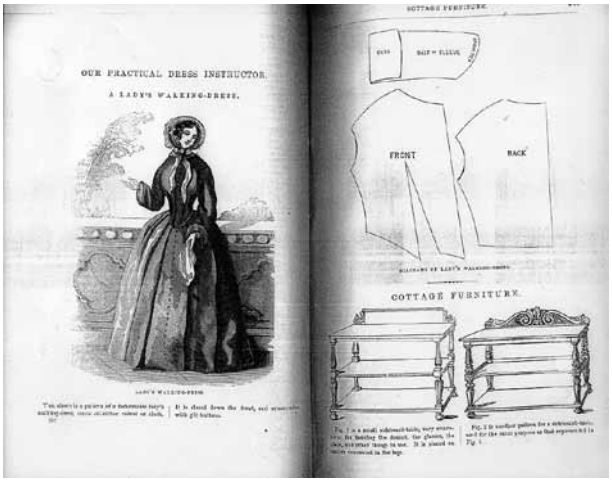
（図１）*Lowell Offering*（1845年8月号より）

（図２）「お針子」（George G. Foster, *New York in Slices* より）

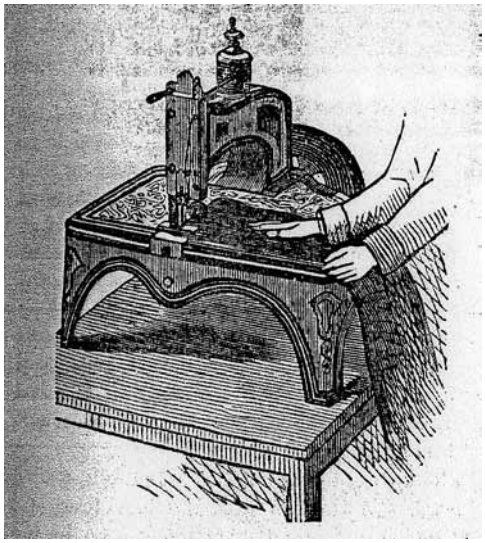
（図３）*Lady's Book* のファッション・プレート
（1833年７月号より）



（図４）“Boy's Tunic Dress”
（*Godey's Lady's Book*, 1853年4月号より）



（図５）“Our Practical Dress Instructor”
（*Godey's Lady's Book*, 1854年３月号より）



（図６）“The New Sewing Machine”
（*Godey's Lady's Book*, 1854年3月号より）

註

1）Elizabeth Wayland Barber, *Women's Work*, New York: W. W. Norton & Company, 1994, p29.（邦訳はエリザベス・W・バーバー『女の仕事』中野健訳，青土社，1996年，26頁。）

2）以下の拙論を参照。「19世紀半ばのイギリスにおける『お針子』の表象」『神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要』第5巻第1号，75～83頁。

3）Judith Brown, “Note on the Division of Labor by Sex,” *American Anthropologist*, New Series, Vol.72, No.5 (Oct., 1970), pp.1073-1078.

4）Alice Kessler-Harris, *Out to Work*, Oxford: Oxford University Press, 2003(1982), p25.

5）Susan Burrows Swan, *Plain and Fancy*, New York; A Rutledge Book, 1977, pp.18-23.

6）Kessler-Harris, *op.cit.,* p.25.

7）*American State Papers,* House of Representatives, 11th Congress, 2nd Session Finance: Volume 2, p.427-428. 17 July 2012 <http://memory.loc.gov/cgi-bin/ampage?collld=llsp & filename=010/llsp010.db&recNum=432>

8）Kessler-Harris, *op.cit.,* pp.32-34.

9）Charles Dickens, *American Notes,* London: Penguin Books, 2004 (1842), p76.（邦訳はチャールズ・ディケンズ『アメリカ紀行（上)』伊藤弘之・下笠徳次・隈元貞広訳，岩波書店，2005年，150頁。）

10）“*Lowell Offering*,” Lowell, Mass.1840-1845.『ローウェル便り』は，女工たち自身が執筆した物語やエッセイ，詩などを掲載した定期刊行物であり，創刊当時の価格は6.25セントで複数の書店で販売されていた。

11）Dickens, *op.cit.,* p.78.（邦訳はディケンズ，前掲書，149-155頁)。しかしながら1830年代半ばから労働環境は徐々に悪化していたことも指摘されており，その社会的背景についてはKessler-Harrisの前掲書（pp.38-40）を参照。また女工の工場労働と健康被害については久田由佳子「工場制度成立期におけるローウェルの女工たち―その生活と労働―」『アメリカ研究29』1995年，233-234頁を参照。

12）A・D・チャンドラー『経営者の時代（上)』鳥羽欽一郎・小林袈裟治訳，東洋経済新聞社，1979年，94-95頁。また1840年代までに農業以外で生計を立てていたアメリカの労働者は37%であり，製造業はそのうち10%未満であったという。（Kessler-Harris, *op.cit.,* p.29.）

13）チャンドラー，前掲書，109-110頁。『マックレーン報告書』は北東部10州を扱っているにすぎず，州ごとの調査事項には偏りが見られるが，同資料で示されたアメリカ産業の輪郭が覆されることはないとする見解を示している。

14）*Report on Condition of Woman and Child Wage-Earners in the United States, Volume IX,* Washington Government Printing Office, 1910, p.55. 同書付録の別表9（255頁）では，1850年の女性労働者数は22万5298人で全体に占める女性の割合は23.3%であり，そのうち紡織業が8万6787人で50.2%，衣服産業が11万5459人で49.5%の割合であった。紡織・衣服産業の女

性労働者は19世紀末まで増加し続け，他の製造業と比べて圧倒的に女性の割合が高かった。

15）*Ibid.,* pp.52-53.

16）Thomas Dublin, ed. *Farm to Factory,* New York: Columbia University Press, 1993(1981), pp.126-127. 女工の手紙を編纂した同書にはメアリー・ポール（Mary Paul）が1845年12月に父に宛てた手紙が掲載されている。6.5ドルの賃金から4.68ドルの宿舎代を支払い，残金で靴やオーバーシューズを購入した事が記されている。女工の買い物については以下を参照。久田，前掲論文，235-236頁。

17）Kessler-Harris, *op.cit.,* p.26.

18）Mathew Carey, "Essays on the Public Charities of Philadelphia," Philadelphia: Clark & Raster, 1830, p.41. (Reprinted in *Miscellaneous Pamphlets,* Nabu Press, 発行年記載なし）

19）Mathew Carey, "Report on Female Wages," *Miscellaneous Essays,* 1830, p.270.(The British Library Historical Collection による復刊。発行年記載なし）付記によれば，同報告はフィラデルフィアの日刊新聞八紙のうち四紙に掲載を拒否されたという (272頁)。

20）しかしながらお針子はただ不遇に耐えていたのではなく，1840年代には賃金の引き上げを求めて団体を組織したりストライキを行ったりした。仕立工やお針子の労働運動については以下を参照。Kessler-Harris, *op.cit.,* p.40.　Norman Ware, *The Industrial Worker* 1840-1860, Chicago: Elephant Paperbacks, 1924, pp.52-53.

21）Sean Wilents, *Chants Democratic,* Oxford: Oxford University Press, 1984, pp.119-121.(邦訳はショーン・ウィレンツ『民衆支配の讃歌（上)』安武他秀岳監訳，木鐸社，2001年，148-149頁。)

22）George G. Foster, *New York in Slices,* New York: W. F. Burgess, 1849, p.51. (Kessinger Legacy Reprints による復刊。発行年記載なし）

23）ニューヨークの人口については以下を参照。Ira Rosenwaik, *Population of New York City,* New York: Syracuse University Press, 1972, p.16, pp.33-45. ニューヨークは1840年代に最も激しい人口の増加を見る。1840年に312,710人を数えた人口は，1850年には515,547人となる。

24）Robert Ernst, *Immigrant Life in New York City 1825-1863,* New York: 1949, pp.214-217. Willents, *op.cit.,* p.403. 1855年の統計では，ニューヨークの主要な20の職業の労働者総数208,891人であり，そのうち家事奉公人は31,749人（全体の15.2%），日雇い労働者20,238人（9.7%），事務員13,929人（6.7%），仕立工12,609人（6.0%），婦人服仕立・お針子9,819人（4.7%）であった。

25）例えば以下を参照。Mary Spenser Pease, "The Dress-maker and the Dress-Wearer," *Godey's Lady's Book,* 1851, Dec., pp. 325-331.

26）19世紀初頭のアメリカ女性たちの社会的身分が賃金労働によって明確に隔てられていた様子については以下を参照。Kessler-Harris, *op.cit.,* p.30.

27）マダラインの日記については以下を参照。Dell Upton, ed. *Madaline*, Georgia: The University of Georgia Press, 1996, p.214. またマダラインを始めとする19世紀アメリカ女性の日記については以下を参照。大井浩二『日記のなかのアメリカ女性』英宝社，2002年。

28）*Godey's Lady's Book,* Philadelphia, L. A. Godey, 1830-1898. 編集者の交代によるタイトル名の変更については以下を参照。Frank Luther Mott, *A History of American Magazine 1741-1850,* Cambridge, Harvard University Press, 1966, p.580.

29）アメリカに流行文化の定着する以前，女性誌としての『レディズ・ブック』が描いた理想的女性像については次の拙論を参照。「フィラデルフィア・ファッション―『レディズ・ブック』における「良き女性」の表象―」『服飾美学』第47号，55〜72頁 .

30）"Health and Beauty," *Godey's Lady's Book,* 1847, July, pp.49-50.

31）Upton, *op.cit.,* p.214.

32）女性誌のテーマとして「ファッション」が価値を獲得していくプロセスについては次の拙論を参照。「正統なるファッションとは―『ゴーディズ・レディズ・ブック』のファッション・プレートをめぐる言説―」『美学』第235号，84-97頁。

33）Karen Halttunen, *Confidence Men and Painted Women,* New Haven and London: Yale University Press, 1982, pp.64-65. 都市経済の発展と人口の流入，中流階級の成長を背景として，ファッションは流動的な社会においてステータスを誇示するための手段，すなわち人間関係を構築するための社会悪と見做されるようになる。

34）Mott, *op.cit.,* p.581.

35）掲載記事の多様化については次の拙論を参照。「19世紀アメリカアメリカにおける女性と装飾―『ゴーディズ・レディズ・ブック』を通じての考察」『デザイン理論』第56号，pp.45-58.

36）1840年代後半から1850年代前半にかけての同誌における女性像の変容については次の拙論を参照。「縫う女性の表象―『ゴーディズ・レディズ・ブック』を手がかりに―」『美学』第242号，pp.155-166.

37）Joan Severa, *Dressed for the Photographer,* Ohio: The Kent State University Press, 1995, p.9.

38）"Boy's Tunic Dress," *Godey's Lady's Book,* 1853, Apr., p. 364.

39）*Godey's Lady's Book,* 1853, Mar., p.286.

40）*Ibid,,* 1853, Apr., p.380.

41）*Ibid.,* 1859, Apr., p.378. 編集後記の情報記事において，マサチューセッツ州ニューポートの John.G Tilton 社製造の1セット25セントの型紙を紹介しながら，型紙の使い方を説明している。

42）*Godey's Lady's Book,* 1857, Apr., p.362.

43）"The New Sewing-Machine," *Godey's Lady's Book*, 1854, Mar., p.127.　さらに1855年には Grover, Baker 社のミシンがイラスト付きで紹介された。『サタデー・ポスト』誌の編集者による体験使用のレポートも引用され，ミシンが人々の関心を引

きつけながら徐々に家庭の中へも普及し始めていく様子が窺える。(1855, Aug., p.185.)

44) Edith Wharton, "The Age of Innocence," *Wharton,* New York: The Library of America, 1985, pp.1015-1302.（邦訳は『無垢の時代』佐藤宏子訳，荒地出版，1995年）